



TITLE:

遊星課の新設を熱望す (黃道光の研究號)

AUTHOR(S):

沓掛, 七二

CITATION:

沓掛, 七二. 遊星課の新設を熱望す (黃道光の研究號). 天界 1933, 13(149): 345-345

ISSUE DATE:

1933-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162401>

RIGHT:

遊星課の新設を熱望す

黄道光課(長野縣) 沓 掛 七 二

約2ヶ年毎に地球を來訪する火星は、その接近の數ヶ月間、私達の注目の的となる。遊星の表面の模様はすべてスケッチによるものであつて、特殊の設備と技術とを以てする寫眞観測すら小望遠鏡によるスケッチに劣るのであつて、私達素人天文家に與へられた最も意義ある観測の一つは遊星表面の觀察である。

極光や黄道光が太陽活動と密接な關係にあることは定説であるが、太陽から放射される帶電微粒子が他の遊星にも作用してゐることが考へられる。遊星中で最も観測し易いのは木星であつて、その形が大きく、光が強いために、殆んど年中観測の對象となる。

木星の所謂「赤道帶」が時々美しい橙黄色を示し、而もこの變化が約12年を週期としてゐることが知られてゐるが、太陽黒點の活動週期と結びつけて考へられる。

遊星の表面観測は、小望遠鏡でかなりの成績をあげることが出来る。先般の火星の接近に當つては、淺野氏、渡邊氏、福井氏等が貴重な記録を残されたことを倉敷の荒木氏から聞いた。

三日坊主で止しては効果がないが、5年とか10年とかの長年月にわたつて観測につとめることは誠に有意義で、その間の太陽や黄道光の活動との關係を更に具體的に究めることは非常に重要である。観測結果は遠慮なく發表すべしといふのが山本先生の御意見である。

観測部の一課として「遊星課」設置の議があるが、今や實現の時に面してゐる。適當な機械を持つてゐる多くの有力な諸君の參加せられるであらうことを信じ、その設置を熱望するのは私一人のみではあるまい。

本年度の總會は

本年度の東亞天文協會總會は來る十一月初旬、東京に於いて開催される。今年の總會で期待すべき事は多々あるが、先づプログラムを示すと大體次の如くである。

一 協 議 會	二 研究發表會	三 親 睦 會
四 講 習 會	「天體觀測法」 約 一 週 間	{ 山 本 會 長 五 藤 齊 三 氏
五 講 演 會	「最近の北米天文學界」	山 本 會 長
六 見 會	東京天文臺その他	

今年は特に山本會長の歸朝後間もない事であるから、この會合を機會に大いに新知識が輸入されようし、關東方面では本會最初の長期天文講習會や、殊に廣く會員達の日常の研究事項を相互に自由に發表し得る研究發表會、天文に關連した諸處の見學等が豫定され、今からその盛況が偲ばれる。

精細は次號に發表する。各地からの多數會員の參會を希望して止まない。
(東亞天文協會)

倉 敷 天 文 臺 水 野 千 里 著

小學校教科書
に現れたる

天文教材解説

全一冊 定價金參拾錢
郵 稅 金四錢

發 行 所

東 亞 天 文 協 會